経済学とは何か

白　石　晃　三

1　経済学は何を扱うのか

刑法で人間を考える時，問題となるのは，行為論といわれる。（犯罪）行為を人間の何に置くか。重要な対立点として，人間の心の中までを対象とするか，行動の結果のみを扱うのか，というのがある。前者が「有意的行為論」，後者が「自然主義的行為論」で，通説は前者であったが，近時後者の考え方も支持を得つつある。私は，この対立の原点が「他者への理解」にあるように思える。つまり，他者を完全に理解できるとするなら前者，そうでないなら後者，ということである。とりあえず，私はここで弁証法的手法は用いないが，それぞれの問題点を指摘しておく。「有意的行為論」における人間の自発的意思はどれほど＜客観的＞に把握されるか。「権力」による「服従する主体（subject）」として刑法は存在しているのか。客観的事実要素から出発する「自然主義的行為論」は人間の反射行動や夢遊病者，幼児の挙動をどう扱うのか。

ところで，新古典派経済学にこれを当てはめてみるとどうだろう。新古典派の人も認めるようにその理論の多くがこうした意識を持たずに人間を描写している。経済学者が陥りやすい落とし穴は，学派の形而上学と自らの形而上学に基づく仮定を完璧に演繹したり，証明することでそれが真理であると正当化することである。私が新古典派を題材に選んだのは，約１世紀にわたりこの学派が世界に与えた影響に対し，稚拙ながらも自己の検査を入れてみることで今後の経済学を学ぶ際の指針を得たいからである。

レオン・ワルラスは新古典派の創始者であり，現在最も影響を与えている経済学者の一人である。彼は経済学に数学を導入する際，「有為的行為論」と「自然主義的行為論」の問題に直面した。［ところで先ず，世界に発生する事実は二種類あると考えることができる。その一つは自然力の作用に起源を有するものであり，盲目的で運命的な力である。他の一つは人間の意志に起源を有するものであり，聡明で自由な力である。(1)］しかし，彼はこれを経済学の先人の分類方法である技術と科学，人格と物，道徳科学と自然科学の分類にそのままあてはめようとした。21世紀の日本に生きる私にとって，なぜ技術と科学を区別するのか不思議だったが，このことについては「科学とは何か」で考察してみたい。人格と物については［自ら意識をもたず自己を抑制しないすべての存在は物である。自意識を有し自己を抑制するすべての存在は人格である。人間のみが人格であり，鉱物，植物，動物は物である。(2)］［物の目的は人格の目的に合理的に従属している。……また物は悪も善もなし得ないので，それは常に罪がない。……それゆえ人格は物の目的を自己の目的に従属せしめる能力と自由をもっている。この能力と自由は特別な性質を帯びている。それは道徳的力であり，権利である。(3)］これを理解するには次の考え方が参考になる。［神はまた言われた，「われわれのかたちに，われわれにかたどって人を造り，これに海の魚と，空の鳥と，家畜と，地のすべての獣と，地のすべての這うものとを治めさせよう」。(4)］［神はまた言われた，「わたしは全地のおもてにある種をもつすべての草と，種のある実を結ぶすべての木とをあなたがたに与える。……(5)］やはり彼にとっての問題はいかにして数学を用いた記述を正当化するかであった。経済学の中で数学を素直に用いにくい部分を後回しにした。これは

---

(1)　A．第一編第二章，p. 17
(2)　A．第一編第二章，p. 18
(3)　A．第一編第二章，p. 18
(4)　E．旧約聖書，創世記，第一章26
(5)　E．旧約聖書，創世記，第一章29

後のマーシャルとは対照的である。この対照は理論の組み立てかたの対照である。ワルラスはまず交換の理論だけで世界をつくってしまう。そして，生産の理論を加えていく。一方，マーシャルは世界の中に交換も生産も置くが，とりあえず生産はエポケーするやり方をとる。

ライオネル・ロビンズは当の問題を経済学と心理学の問題と考えた。そして［新しい真理を発見するという，面白くてたまらない仕事に夢中になっている専門家の経済学者は，通常，答える価値なしとして無視した(6)］ことに対して検討を加えた。彼は［現代の主観価値論の創始者たちのうちのあるものが，実際その命題（人間の相対的価値判断の仮定：筆者註）に是認を与えるものとして心理学上の快楽主義学説の権威を求めたことはよく知られている。(7)］と言って，ゴッセン，ジェボンズ，エッジワースをやんわりと批判した。(8) 経済学を希少性で定義するロビンズにとって［最近の価値論を知ったものならだれでも，それが心理学上の快楽主義と――ないしはその点では他のいかなる商標の特殊心理学（Fach-Psychologie）とも――なにかの本質的な関連をもっている，とあからさまに論じつづけることはできないであろう。(9)］彼の立場は［心理学の研究することがらをそれら定理自体を演繹するさいの所与と考える……(10)］であり，その理由は［事実，われわれは選択・無差別・選好等のような言葉を内的経験の形で理解する，ということは全く確かなことである。経済的なもの，というわれわれの考え方にとって根本的に重要な，目的という概念は，単に外面的な行動だけのタームでは定義することはできない。もしわれわれが，目的の多様

（6） B．第四章－四，p. 127
（7） B．第四章－四，p. 128
（8） B．第四章－四，p. 129
［しかしながら，経済学者の実際やったことと，それが含んでいる論理と，かれらの折々の事後の弁解とを区別するということは根本的に重要なことである。］ここに彼の批判が，先人の権威に対する敬意と混ざり合っている一端が窺える。この本の中にはいたるところでこうした慎重な弁護がある。
（9） B．第四章－四，p. 129, 130
（10） B．第四章－四，p. 131

性に関連しての手段の希少性から生ずる諸関係を説明すべきであるならば，必然的に，少なくとも，いわば方程式の半分は精神的性質のものでなければならぬのである。[11]］さらに彼はこの精神的な部分を考慮するところに自然科学と社会科学の違いの一つがあると言い，マックスウェーバーの没価値性（Wertfreiheit）を持ち出して，精神的な部分を考慮しても客観性は失われない，として正当化する。したがって慎重に人間の合理的行動が経済分析に含まれるとする。合理的とは社会的な価値判断ではなく，矛盾がないこと，「目的のある」こと，を意味する。そして構造の中に形式的に矛盾のある一定の余地を認めることで，経済学が人間の行動に完全に矛盾がない事態の説明に限らないとし，その上で［もし目的のある行動が全然存在しないならば，経済現象は全然存在しない，と論ずることができるであろう。[12]］と述べた。彼はこの論理を展開することで，ミーゼスの合理性の仮定への非難を退けた。

ロビンズにとって「経済学の本質とその意義」を記す目的は二つあった。自らの希少性定義を広めること，そして新古典派の擁護である。新古典派理論が砂上の楼閣になる前に急いで「砂を固める」ことが必要であった。経済学者が勝手に用いて箍が外れそうな諸概念を必死でまとめようとする努力がこの本のいたるところで窺うことができる。その最大の苦心の策が経済学を希少性で定義することだった。その成果は例えば，［「経済学」（ロビンズはこれは本当の経済学ではないと主張したいのだろう：筆者註）は，ただ金もうけと私利にのみたずさわっている経済人（Homo Economicus）の世界を仮定する，というしばしばくりかえされた非難……[13]］に対し，自らの希少性定義を用いて，それが目的の中に手段を入れている誤りからきていることをいうことで，非難を回避した。ワルラスは新古典派の創始者であったが，彼は「経済学は何を扱うか」について深く考えなかった。彼は，かつて先人がその取り扱いに失敗して広め

(11)　B．第四章－四，p. 133
(12)　B．第四章－五，p. 141
(13)　B．第四章－六，p. 143

ることができず，埃を被るにとどめていた（数学という）魔法のステッキをいち早く手に入れたことで，自分や同業者の世界のいろいろな要素にステッキを振りかざすことに夢中になっていた。われを忘れた彼は自信満々にこう宣言してしまう。［今日の経済学が天文学や力学のように経験的であると同時に合理的でもある科学であることは確実である。そしてこれまで久しい間前者の性質によって後者の性質が蔽いかくされていたが，これを非難することはできない。］(14)［近い将来の20世紀においては，フランスにおいても，社会科学を，一般教養があって帰納と演繹，推理と経験とを同時に駆使することに馴れた人々の手に任せる必要を感じるであろう。そのとき数理経済学は天文学や数理力学と並んでその地位を占めるであろう。その日にこそわれわれがした仕事が正しく評価されるであろう。］(15) しかし実際は半世紀年も経たずしてその魔法の効力，かける世界に疑問符がついた。それに対し，ケインズは修正を，ロビンズは擁護を，ロビンソンは（後に）破壊を，行った。それはワルラス以降の社会主義者たちが，各自「現実」を前に，学派から受け継いだ形而上学世界をどうしたかを意味している。先人たちはだだ失敗したのではなかった。みな数学の美しさに惹かれたが，その扱い，その影響が，自己の意思，現実を超えてしまうことをおそれたため，使いこなす自信を失ったのだった。（ゴッセンやイスナールだけでなく，ここではリカードも含まれているように思われる。リカードは［顕著な場合＝strong cases］，経済理論は［幾何学のように明瞭だ］といい，［この学説が真理であることは絶対に証明できるものと信じます］と述べたが，［あらゆる経験はこの見解を支持しています］とは言えなかったのだ。）新古典派は何を扱っているのか，それに対し，新古典派は効用と希少性を捨てることはできなかった，と答えることができよう。

これがこの章のまとめになるだろう。

---

(14)　A．第四版への序文，p. xix

(15)　A．第四版への序文，p. xx
　　リカードの引用は，D．

今まで頻繁にあらわれた形而上学の意味については，その理論が現実に検証できない意味合いから多く使用してきたが，形而上学とはなにを意味しているかについては後に述べるとする。

2　科学とは何か

経済学は何を扱うか，を考える時に新古典派の経済学者はそれが科学であることを強調する。ワルラスは(14)で見てきたし，ロビンズの希少性定義は［経済学は，諸目的と代替的用途をもつ希少な諸手段との間の関係としての人間行動を研究する科学である。(16)］というものであった。この科学というのは当然同じことを示してはいない。当然とはいってもこの科学が何を示しているか明らかにすることは意義のあることと思われる。なぜなら，それによって彼らが経済学をどう捉えているかがより明確になるだけでなく，経済学をどう扱うか（経済学の方法論）の理解の助けになるからである。

私が改めて感じたのは，科学がエピステーメを体現しているということである。現在の科学の考え方をしめしたのはデカルトの『方法序説』だと思う（フーコーなどはそうではないと主張する)。そのなかで，デカルトは正確に神の摂理を認識できることを説いた。私はこのデカルト的主体こそが科学者のプロト-スタイルだと考えている。この主体が神の摂理を認識できるのは，「良識」(bon sens）を持つからだ。この「良識」は一見当たり前のことのように思える（彼は［きちんと判断し，ほんものをにせものから区別できる秘められた力，これこそ本来良識なり理性（raison）なりと名づけられるものなのですが，そういう力がどの人にも生まれつき平等にそなわっている……(17)］）が，この最も開かれた世界が，それゆえに最も排除に厳しい（例えば，狂人に対したとき）ことは後の科学の世界を暗示していておもしろい。

やがてデカルト的主体の中に「大学」で「知識」を伝えるものがでてくる。

---

(16)　B．第一章－三，p. 25
(17)　G．第一部，p. 10

こう述べると，デカルト以降，科学者がいたような誤解を生みやすい。ワルラスの中に［ケプラーの天文学，ガリレオの力学がニュートンの天文学となり，ダランベールとラグランジュの力学となるには100年から150年または200年を要したのである。[18]］と自分を偉大な「家系図」に加えようとする意図が見られるが，科学者（scientist）という言葉がうまれたのは1840年頃[19]である。つまり，大雑把にいってワルラスの生まれた（1834年）頃，科学者も誕生したことになる。そして1874年にはJ.W.ドレイパーが『宗教と科学の闘争史』を出版し，その中で［ドレイパーは自分を科学者と位置付け，そして，過去の人々を，「科学者」という立場から善玉と悪玉に分類し，善玉に分類された人々（コペルニクス，ケプラー，ガリレオ等）は躊躇なく「科学者」として，自分の仲間に引き入れてしまっています。そして悪玉に分類されたものの象徴が「教会」であるわけです。[20]］ということを行った。したがってワルラスの(18)はその当時の風潮をあらわしていることになる。

同様に考えると，彼が経済学を問題にするとき，「科学，技術および道徳の区別」（第一編第二章）にこだわるのはなぜかも明らかになる。私はよく「科学技術」と両者を区別せずに使うが，これにも私の不注意以外の理由がある。《science》の語源はラテン語の《scientia》であり，この意味は「知識」である。当時はまだ《science》は「知識」のなかの極めて特殊な狭い領域を指し，それは「大学」の中で扱われると考えられていた。一方，技術はもともと職人たちのギルド，そして親方・徒弟制度のなかで伝承されるべきものとして捉えられでいたが，市民革命をきっかけにしてエコール・ポリテクニーク[21]ができた。したがって，彼の頭の中では「科学」と「技術」は区別され，また，自分は（長

(18)　A．第四版への序文，p. xix
(19)　F．第一回「科学」の誕生，p. 9
(20)　F．第二回　勝利者史観の科学史，p. 17, 18
(21)　フランス国家が建設した「学校」。「大学」と違って誰でも入学できる。学生は公務員として給料をもらい，「民生技術」，「軍事技術」を学ぶ。卒業後は国家のために働くことになる。F．第八回　19世紀の「科学」と「技術」参照

い間知識・伝統を担ってきた）「大学」で「科学」を研究しているという自負から［厳密にいえば，科学のために科学を研究するのは科学者の権利である。(22)］という言葉が出てくる。ちなみに日本は1877（明治10）年に東京大学と（技術修得のための）「工部大学校」が誕生するが，1886（明治19）年には両者は合併し「東京帝国大学」となった。つまり，「工部大学校」は東京帝国大学の「工学部」となった。そして19世紀末には，大学卒の工学士が産業界，工業界で働いていたが，これは当時としては極めて先駆的なことであった。（欧米で工学士が働くようになるのは，1930年代の頃である。）

ロビンズの頃になると，ワルラスのかけた魔法の効力が弱くなってきて，経済学は実証科学でなければならないと主張する人（T. W. ハチソン）が登場する。それを受けてロビンズはマクロを経済学から除外せざるを得なくなる。［わたくしがそこで主張したのは，異なった個人の異なった満足を総計したり，比較したりするのは，事実の判断ではなく，価値の判断を含んでいるということ，および，かような判断は実証科学の範囲をこえるものであるということ，にほかならなかった。(23)］では実証科学とは何か。ハチソンは，ポパーの考え方を知っており，経済学の主要仮定，結論（「最終命題」）の両方について経験的テストを求めていた。(24) これに対して当然，新古典派からの激しい反発があり，結果として新古典派の形而上学をより強固にさせるきっかけとなった。

こうして考えてみると，科学といってもその捉えかたが人によってかなり違うことがわかる。今では，［科学（特に自然科学：筆者註）は自然のなかに起こる現象を物質にかかわる概念だけで説明し記述しようとするものです。(25)］という考えに異議をはさむ人はほとんどいないと思われるが，新古典派の経済学

(22) A．第一編第三章，p. 30.
　方法論者はこの部分を引用して，ワルラスの理論は実証を相手にしていないと考える。D．第六章ワルラスとパレート参照
(23) B．第二版への序言，p. ix
(24) D．19章ロビンズとハチソン参照
(25) F．第三回 現代の「科学」とは，p. 28

者の意図している科学は必ずしも物質だけを想定しているわけではない。ワルラスは人格と物との関係を扱う理論を「応用科学」または「技術」と呼び，人格と人格との関係を扱う理論を「精神科学」または「道徳学」と呼んだ。したがって，物と物との関係を扱う［純粋経済学は物理数学的科学と全く類似した科学である。(26)］ロビンズは『経済学の本質とその意義』の中で経済学の「物質主義的定義(27)」をしりぞけ，「希少性定義」を採用している。［このような形でその定義（「物質主義的定義」：筆者註）は全領域を「含み」うるかもしれないが，しかし全領域を示しているとはいえないのである。というのは欲望充足の物質的な諸手段ですら，それに経済財としての地位を与えるものは，その「物質性」ではなく，価値判断に対するその関係だからである。(28)］これまでを受けての私の考えは，経済学が科学というなら，それは現状では経済社会の物質面のみを扱い，その理論は検証可能という点で開かれていなければならない。もし人間の精神面を扱いたいならば，自然科学検証方法を借りてくるのでなく，独自の検証方法を示さねばならない。それができるまでは「科学」（デカルト的主体が，開かれた学問として扱う）ではなく，形而上学である。新古典派は数学を用いることで，研究手段は特定の言語依存から脱却して広がりをみせたが，その世界そのものは形而上学として深い「底」に沈殿した。多くの経済学者は新古典派の手段の美しさに幻惑され，「パズル解き」に夢中になり，自分の置かれている「場所」について考えることを（よほど気をつけていないと）忘れてしまうのではないかと思われる。

では，こうした新古典派の方法論とその問題点について，次に考えてみたい。

3　新古典派経済学の方法とその問題点

この章が重要であることに，異論はないだろう。しかし，この問題がいかに

(26)　A．第一編第三章，p. 29
(27)　B．第一章－二，p. 10, 11
(28)　B．第一章－五，p. 34

大変なものであるか，ということをはじめにことわっておく。まず，新古典派の経済学者は，自らの研究方法を明確に示すことが少なく，もっぱら，数学の精密さに思考をめぐらせている。これは，言い訳かもしれないが，次のエピソードはこの困難を暗示しているように聞こえる。「J．ヒックスは，かつて，経済学とはどういう学問なのか，を何度か定義しようとしてうまくいかず，結局，≪経済学とは経済学者のやっていることだ≫と定義するに到った。」これは，一種の循環論だと思うが，この原因は新古典派そのものにあると，最近考えるようになった。とりあえず，ヒックスの言うとおり，まずは新古典派経済学者のやっていることから話を進めていこうと思う。

ワルラスは自分の学説の要約を次のように始めている。[「純粋経済学」は本質的には絶対的な自由競争という仮説的な制度の下における価格決定の理論である。「稀少」であるために，いい換えれば「効用」をもつとともに「量が限られている」ために価格をもつことができる物質的，非物質的なすべての物の総体は，「社会的富」を形成する。純粋経済学が同時に「社会的富の理論」でもあるのはこのゆえにである。(29)] 自由競争については注釈があって，これがタトヌマンを満たす制度であること，そして，この制度については，応用経済学が扱うものとしている。したがって，「純粋経済学」では，自由競争制度は仮定である。彼は「純粋経済学」を「応用経済学に先行させることで(26)を可能にさせている。価格の決定については，貨幣がないので，価値尺度財に基づいて暫定的に「価格」を付けておいて，物質的，非物質的なすべての物の「価格」が偶然に叫ばれた時，タトヌマンの調整によって「均衡市場価格」が決定する。「社会的富」とは[物質的または非物質的なもの〔ものが物質的であるか非物質的であるかはここでは問題ではない〕であって「稀少な」もの，すなわち一方においてわれわれにとって「効用」があり，他方において「限られた量」しか獲得できないもののすべてを社会的富と呼ぶ。(30)] では，効用とは何か。[私

(29)　A．第四章への序文，p. x
(30)　A．第一編第三章，p. 21

（ワルラス：筆者註）が効用をもつというのは，それが何らかの用途に役立つことができるということ，それが何らかの欲望に応えこれを満足することを可能ならしめるということである。[31]］ここで効用はどうやって得られるかを示さなかったことが後の経済学者を悩ませることになる。彼は社会的富の仮定を演繹して三つの結論を出す。①社会的富は「専有」せられる。②社会的富は「価値」があり，「交換」することができる。③社会的富は，「産業的に生産」または「増加」し得られるものである。

ワルラスの方法論はまず，社会をまず自分の頭の中でとらえる。この時，経験的という言葉がでてくるが，これは，日常の自分の経験からという意味であって，何かのデータにもとづいているわけではない。次に，経済学用語を使って，自分の形而上学の理念型をしめす。この理念型は経済学的であるが，多くの経済学の入門者を悩ませる。［K は資本であり，ΔK は投資である。それでは K とは何か？　そりゃ，もちろん資本だ。それは必ず何かを意味しているにちがいない。だから，K によって一体何が意味されているか答えてほしいなどと問うおせっかいなやかまし屋のことなど気にしないで，どんどん分析を続けようじゃないか……[32]］この時点で，資本，市場などが，具体的直接経験の世界から伝聞・情報による世界へと認識を移さなければ理解できないことに気づく。理念型は定義であり，それを「純粋に」論理的に推理を行った結論は「法則」（理論）となる。この理論は「純粋」であるがゆえに現実の審査をうけつけないとする。ただ現実には適用されるのである（応用経済学）。そして，自ら数学が使えるようにつくっておきながら［純粋経済学すなわち交換価値と交換の理論，いい換えれば社会的富の本質を考察する理論が，力学や水力学のように物理数学的科学であるとするならば，数学の方法と用語を用いるのに躊躇する必要はない。[33]］と言う。「均衡市場価格」は先験的であるとしているし，

(31)　A．第一編第三章，p. 21
(32)　C．第三章新古典派――効用――，p. 112
(33)　A．第一編第三章，p. 29

前段落の①，②，③は自分の御伽噺を現実にあてはめたものである。［現実に帰るのは科学が成立した後であり，応用を目的としてでなければならない。[34]］19世紀では当たり前のこの一言が，20世紀には頑丈な「壁」に守られた「閉じた」世界を造ることになってしまった。[35]「効用」については最後にまとめて考える。

ではロビンズはどうか。彼の主張をいくつか見てみよう。［われわれの拒否した考え方，……は「分類的な」考え方とよびうるものであった。……われわれの採用した考え方は「分析的な」考え方ということができる。それは，ある種の行動をえらびだそうとするのでなく，行動の特殊の側面，すなわち希少性という力によって課せられる方式，に注意を集中する。[36]］［「希少性関係」の合成物の全体――賃銀・利潤・物価・資本化の割合および生産の組織――にいかなる影響を及ぼすかを追跡することはそれほど容易なことではあるまい。それどころか，こういった影響の理解を可能ならしめる一般法則を案出するためには，抽象的思考の絶大な努力が要求されるのである。[37]］［経済学者にとって重要なのは，これらのものの間の諸関係であって，これらのもの自体ではないのである。……「経済理論」は形式を記述し，「経済史」は実体を記述する。[38]］［「経

---

(34)　A．第一編第三章，p. 30

(35)　新古典派は，近代以降最も輝かしい成功を収めた「自然科学の方法」を都合よく援用して「壁」をつくった。その内部では，規約主義的な公理を土台に「集合」，そして高度な数学にまで確実に積み上げられた「ピラミッド」が存在する。これはもうどんな天才でもかえることはできないだろう。すなわち，内部での自己改革は不可能である。

"We are all just prisoners here, of our own device."
"Relax", said the professor of economics,
"We are programmed to receive.
You can check out any time you like,
but you can never leave."

(36)　B．第一章－四，p. 26

(37)　B．第一章－四，p. 30

(38)　B．第二章－五，p. 58, 59

済学」は，いかなる点においてもその学説が主張する諸関係を仮定するものでもない。[39]］［資源の最初の分配が与えられるならば，市場に入り来る各個人は相対的価値判断の尺度をもっているものと考えてさしつかえない。[40]］［……価値を選好順序の表現とみる……[41]］［現在の価格と将来価格の予想との間には関連があり，かつなければならぬけれども，現在の価格と「過去の価格」との間には必然的な関連ないしは意味のある価値関係は全く存しない。[42]］［われわれはもはや生産および分配の変化を決定する諸要因について研究するのではない（古典派の否定：筆者註[43]）。］［経済分析の目標は「経済学」はいかに追求されるべきか……を発見することではなく，むしろ経済学がすでになしとげた諸諸の結果に対していかなる意義が与えられるべきか，を発見することである。[44]］［経済理論の諸命題は，すべての科学的な理論と同様に，一連の仮定から演繹されたものであることは疑問の余地がない。……これらの仮定は，ひとたびその本質が十分に理解されるならば，現実におけるその対応物の存在が広範囲の論争を許すような仮定ではない。われわれはそれらの妥当性を確立するために管理された実験を必要としない。すなわち，これらの仮定は，あまりにもわれわれの日常経験していることがらであるから，われわれはただ，それらは明瞭と認められる，と述べさえすればよいのである。[45]］

(38)などからロビンズの方法論は記述的方法論といわれる。その目的は(43)にみられるように静学的ミクロの均衡論の擁護である。そのやり方は方法論的個人主義に基づく，効用の設置。おまけにこの個人の効用は相対的価値観によるものであった。したがって，(40－42)となるし，価値の総計であるマクロは

(39)　B．第二章－六，p. 69
(40)　B．第三章－四，p. 85
(41)　B．第三章－五，p. 91
(42)　B．第三章－五，p. 95
(43)　B．第三章－六，p. 103
(44)　B．第四章－二，p. 111
(45)　B．第四章－二，p. 119, 120

認められないことになる。(36, 37, 45)はワルラスの考え方を支持しているとうけとれる。さらに，ワルラスが不明確にしていた仮定の概念を2つにわけている。(11)のような選好などは内的経験によるもので主要仮定とし，「経済人」や完全合理性などの形而上学部分を補助仮定としている。(44)はロビンズの「実証科学」としての主張であるが，マックスウェーバーを意識したこうした論理は，世界が「である」と「べきである」のどちらかであるということを疑っていないものであり，規範科学を無視したものである。また，彼の批判は慎重である。先人については自分のほうが包括的であるとか正確だという。そして，仲間に対しても，恣意的におこなうのはかまわないと言う。また，慣例的，経験的というのは，非難の理由であるし，自己正当化の理由でもある。

最後に，新古典派の中心概念である，効用について考えてみたい。効用とはなにか。ワルラスは(31)であると言っている。一方，ロビンズは効用は価値判断であるとした。ロビンズは「効用」を科学的に述べようとしたが，そのためにマクロ，厚生経済学（累進課税はその前後で個人の価値観が変わってしまっているから），(42)のような時系列によるエコノメトリックス，を明確には容認できなくなってしまった。一方，現在は，物の消費量を「効用」とすることが多い。これは価値尺度としては相対的であるが，本来の効用の概念からも離れてしまっているように思える。つまり，$U(C)$ の C は稀少であって，限られた量であるという制約があるはずなのに，それがあまり意識されなくなってきている。しかし，これは元々主観的なものを客観的に示さなければならないことに無理があるのではないか。新古典派経済学者は社会主義者が多く，彼らは心優しいので，賃銀は社会的富であって，アダム・スミスのように賃銀を費用としか見ないことには納得がいかなかった。と同時に資本家の資本は「搾取」でなく，資本の生産的な面を評価して，その取り分を資本家にも認めようとした。新古典派の消費者は，欲望や好みについて，明確で，不動の，独立した知識をもつ「ロビンソン・クルーソー」である。しかし，少なくとも私は，社会や友人，広告の影響なしには，順序選好はできない。また，量は定義によって

「限られている」なら，ある人の消費は，同時に他人の消費を切りつめさせていることになる。こうなると，個人が自分の選好が一体本当に選好するものにちがいないか（Reflexive）について自信が持てなくなる。

ロビンソンは自分の形而上学，新古典派の「おかしさ」にきちんと向きあった数少ない経済学者である。彼から見ると［「効用」は，完璧な循環論法で基礎をかためた一つの形而上学的概念である。(46)］また［「効用」の要点は自由放任を正当化することであった。人はだれでも，好みのままに自分の所得を使う自由がなければならない，そうすれば，各種の財貨に費やされた一シリングの「限界効用」を均等化するとき，各人は最大の利益をうることであろう。利潤の追求は，完全競争の諸条件のもとでは，限界費用を価格に等しからしめるように生産者を導いていくだろう。その結果，最大可能な満足が，利用可能な諸資源からひきだされることになる。これは種々のイデオロギーに結末をつける一つのイデオロギーである。というのは，それは道徳問題を排除しているからである。すべての人の善が達成されるには，各個人がただ利己的にふるまいすればよいのである。(47)］彼は，自然科学の手法を安易に取り入れたことについても批判の目を向ける。効用の表現について，［測定の単位というものは，本来，合意に達した約束であって，あらゆる人にとって同一であることを意味している。個人の主観的意識のうちに閉じ込められているようなものは，およそ単位とはいえない。(48)］自然科学は人間が「神の摂理」を理解すると考えるから，自然現象を数量化するのに必要な，反射律，対称律，推移律(49)を置くことができた。

---

(46)　C．第三章新古典派――効用――，p. 77

(47)　C．第三章新古典派――効用――，p. 87

(48)　C．第三章新古典派――効用――，p. 111

(49)　H．

反射律は定義されるものそれ自体が同定できること，対称律はAとBのいずれからみても等値関係あるいは大小関係が確かめられること，推移律は，等値関係については，Cの値cはAを基準にしてもBを基準にしても同一の値を与える条件であり，「物差し」として何を使ってもよいということ，また，

しかし，これをそのまま効用に適用してよいのか。

ロビンズは「限界効用逓減の法則」は限定的に使用，すなわち，個人間でなく個人内部でのみ使用，しなければならない，と考えた。これ自体，新古典派にとって大きな後退であったが，ロビンソンはマーシャルを引用して，さらに重大な問題を指摘する。［マーシャルがいうように，――「しかしながらこの法則〔限界効用逓減の法則〕には，明白にされるべき暗黙の一条件がある。それは，すなわち，われわれがその人自身の性格ないし好みに何らかの変化の生ずるだけ十分な時間を考慮に入れていないと想定している点である。」……（ところが：筆者註）われわれは，相異なる二時点においてでないと，相異なる2セットの価格に対する一個人の反作用を観察することはできない。かれの購買量における相異がどこまで価格の差異によるものであり，またどこまでその間に生じたかれの選好の変化によるものであるかを，どのようにして知ることができるのか？　かれの性格が変化し「なかった」と推定することはたしかにできない。というのは，石けんとウィスキーのみが何も好みに影響を与える唯一の財貨ではないからである。実際上，あらゆるものが習慣の惰性をむさぼらせるか，さもなければ，変化への欲望を啓発するのに影響を与えるのである。(50)］私はこうした点があるので，新古典派の「効用」では動学化は無理ではないかと思う。

ロビンソンはワルラス体系にも批判を加える。ワルラス理論（シュンペーターによるとマーシャル理論の中核はワルラスとほぼ同じだから，マーシャル理論も）にある欠点は，［資本の利潤率と資金の利子率とについて説明する方法を一切用意していないことである。……一定量の「資本」は，その形態を変えても依然として同一であるということの真の意味は，今日にいたるまで決して

大小関係については，これは三つの量の順序づけを客観的におこなうための条件で，これによって二つの量を直接に比較しなくとも第三の量との比較で等値や大小が確かめられるということを意味する。第二章－二，p. 31

(50)　C．第三章新古典派――効用――，p. 83

解明されたことのない一つの神秘である。[51]］私はワルラスの「科学」という形而上学を彼のイデア論の中に見る。［科学（古代ギリシャに科学という言葉はないはず：筆者註）は本体（イデアのことだろう：筆者註）が場面として現れる事実を研究するものであることは，遠い昔にプラトンの哲学によって明らかにせられた真理である。本体は過ぎ去るが事実は残る。事実とその関係とその法則がすべての科学的研究の対象である。[52]］しかし，自然科学はむしろイデアの研究に向かったのではないか，と思う。

人間は形而上学を取り除くことはできるのか。私は形而上学がなければ経済学はなかったし，ないだろうと思う。私には，自由，平等など，真偽を確かめることができない確固たる観念，すなわち，形而上学的世界がある。「自由放任」はケインズがその一部を破壊するまで，多くの経済学者が形而上学と自覚しないで使ってきた。経済学の中で「自由放任」は利己心と利他心の調整のため，理論が積み上げられてきたのだ。ケインズ理論もまた，当然彼の形而上学世界なしには語れない。［ケインズは，ムーアの倫理体系から，「将来にわたる時間の全過程を貫いて期待される善の可能な極大値を結果においてもたらすように行動する責務」について学び，その影響を受けて確率論の研究をはじめた。[53]］経済学の形而上学については，メリットもある。それは一つの見解を示し，行動の指針となる感情を系統だてること，また仮説を引き出す時の知識のもとになるということ，である。しかし，思慮深くないと経済学の中の「科学」と「形而上学」の区別はできない。ロビンソンはポパーが社会科学と自然科学を同様に扱うのは誤りと指摘した上で，経済学に科学の手法を適用することの難しさを明確にさせるため，あえてポパーを取り上げる。［社会科学（あえてそう呼ぶことが許されるならば）に科学的方法を適用するばあい当面する大きな困難は，いまだに，仮説に対して反証をあげるための基準について意見の一

(51)　C．第三章新古典派――効用――，p. 99
(52)　A．第一編第二章，p. 16
(53)　C．第一章形而上学，道徳，科学，p. 18

致がみられないことである。われわれには対照実験の可能性が与えられてないから，証拠の解釈に頼るほかはない。しかも解釈には判断がつきまとう。したがってわれわれには，かつて一度も決定的な解答が得られたためしがない。しかしとりあげる問題自体に必然的に道徳感情がしみ込んでいる以上，判断は偏見によって色づけられることになる。……たしかに，自分自身の仕事を熱愛するあまりに，「正しいにせよ誤りであるにせよ，自分の理論だ！」と考えがちな人間的弱点を免れえない点で自然科学も社会科学も異るところはない。しかし，社会科学のばあいには，それに加えて，第一に，主題がすぐれて政治的かつイデオロギー的色彩の濃いものであるから，当然自己に対する忠誠以外の忠誠を要請されることになる。第二に，（社会科学においては）限定された状況の下で幾度も実験をくりかえすことのできる実験専門の自然科学者のように「公開実験」に訴えることによって決定的とみなされる可能性は存在しない……[54]］［実験方法を欠如しているばかりに，経済学者は，形而上学的概念を検証可能な用語におきかえることをそれほど切迫して必要なことと考えず，また反証が挙げられた事柄についてはお互いに意見を同じくしあうようにしむけることもできないという主要な難点から見ると，個人差の問題は一つの副産物にすぎない。したがって経済学は，一方の足を未検証の仮説の中につっ込み，他の片足を検証不可能なスローガンの中につっ込んで難航している。[55]］

そして，私は新古典派にはこのことが最も顕著に現れていると思う。

4　経済学の将来

科学とは何だろうか。今の私には，科学は定義できないので，それは価値判断や基準に近いものである。私が科学方法論に興味を持つようになったのは，科学の進歩（今では，かなり疑わしいと思っているが）の推進力が技術開発とその費用回収であって，もし，今のままの科学方法論であったなら，今後抜本

(54)　C．第一章形而上学，道徳，科学，p. 36, 37, 38
(55)　C．第一章形而上学，道徳，科学，p. 40

的な進歩は可能なのか，とぼんやり考えたことによる。ところで，現在，実際に多くの科学の分野で，その研究は国家や企業に依存して行われている。国家や企業はそれぞれのイデオロギーにもとづいて，活動しているが，これから先に彼らのイデオロギーが変わることはないのだろうか。現在，近代の国民国家（Nation-state）のイデオロギーはすでにほころびを見せているし，企業はCSRを無視できなくなった。100年前，科学はエジソンのような家内研究と「大学」や「技術学校」が併存して進んだ。しかし，現在，家内研究で進歩が期待されるような科学がどれほどあろうか。

20世紀，我々は「科学」を「消費する」ために，過去50億年の地球の備蓄をエネルーとして活用することが当たり前となった。21世紀はそれに頼りつつ，それとも太陽エネルギーなどの「無限に供給される」エネルギー（本来無限なエネルギーはない。ただ，まだ人間の寿命は短いので相対的に「無限」と解釈しているだけだ）やリサイクル可能なエネルギーの導入を急いでいる。私は最近，新古典派の本を読むことが多くなった。ワルラスによると社会的富は，「効用」があって，「量において限られた」物の全体であるが，そうすると本当に我々の周りのものは社会的富ばかりであると考えてよい。これは普遍のことなのか。実はこれは近代特有のもの，概念，ではないかと思う。ロビンズの希少性は，人間が自然の制約の克服が急に行われた結果，いろいろなものをいろいろなように使えるようになったことを意識しないではありえない概念ではないだろうか。制約と自由は奇妙な関係をもっている。制約がなくなると，自ら自由を拘束しようとする。一方，制約が明確であれば，自由を広げようとする。新古典派は制約を意識した理論体系になっている。そこで問題になるのが，最適値と最適解である。理論上は制約条件は明確であるが，現実にはそうではない。もし，現実に新古典派を体現する人間がいたとする。彼ははっきりしない制約条件を代入して，「最大化」を行う。しかし，その最適解にどれほどの意味があろうか。しかし，個人の効用も企業の利潤も「最大化」する（というイデオロギーが）求められている。その「苦痛」たるや如何。そもそも「最大

化」とは，ある目的に向かって邁進することを意味する。この欠点は一度決まったら，方向性の転換が難しいこと，もし結果で予想されないことが起こったら対応に苦慮すること，である。実際，生産システムの修正，個人の嗜好の修正（による「生活」の修正）に「苦痛」が伴うことは容易に予想されることである。また，よく考えてみると，「限られた量」しかないはずのものが，各個人が効用最大化するのに「足りなくなる」ことがないのはなぜだろう。現実には予算制約は制約にならない。個人も会社も重複債務が可能であるし，いざとなれば「破産宣告」をすればいいだけである。「破産宣告」によって，個人がどれだけ借金してもその下の世代が借金で苦しむことはない。銀行の預金制度を使えば，常に（限度はあるが）収入以上の支出をすることだってできる。「神の見えざる何か」は働いているのだろうか。公害や生活環境の悪化，エネルギー問題は，効用最大化した個人の消費を満たすために，「限られた量」であるはずのものを「強引に」増やしたことへの「ツケ」ではないだろうか。

新古典派と民主主義は，20世紀のアメリカでは一体化している。概念においては自由と平等を同時に実現することは不可能である。しかし，20世紀アメリカなど（つまり，アメリカとアメリカが世界に広めた地域）では，「平等」とは，どこに住んでいようが，同じテレビ，同じ車，が同じ値段で手に入れられることとして「実感」され，「自由」とは，自分が欲しいものを欲しいだけ手に入れられることとして「実感」された。そして，大量生産はこうしたイデオロギーを支えるのに最も都合が良いものであった。

近代以前，希少性を意識しなければならなかった財は少なかったのではないか。例えば，景徳鎮の陶器は，ヨーロッパで王侯貴族しか買わなかった。希少性のあるものは当然のこと，一般に，ものはステータスで配分されていた。たとえお金を持っていても，ステータスがなければものは購入できなかった。誰もが手に入れられるものは誰もが購入できる分だけ存在していた（つまり，積極的制限や予防的制限が頻繁に働いて調整されていた）。しかし，市民社会の誕生でステータスが均一化され，科学技術の進歩で調整のために働く制限は人

知にとって替わった（人権宣言や積極的制限の例として貧困，戦争，災害，予防的制限の例として人口を考えてみれば，よりはっきりするだろう）。人は同じステータスを持つべきである，という共通のイデオロギーは，先程見たように20世紀のアメリカで体現された。近代以降，最善の法や憲法は示せなかったが，最善の経済体制は示せた（ようにみんな思った）。

しかし，実際はあらゆる人の効用のために地球の貯蓄を消費してきた。（「無限エネルギー」でなく本当の）無限エネルギーが錯覚にすぎないことは明らかだし，周りにあふれるゴミをエネルギーにするというのは，ものをエネルギーに変換するエネルギー，を考慮すると限られてくることがわかる。われわれに選択肢は二つしかない。地球のエネルギーを食いつくす前に，地球外からエネルギーを調達するという夢を信じるか，リサイクル可能なエネルギーしか使わないか，である。

本質的に，エネルギーは自然の制約と人間の技術で限定されている。さらにリサイクル可能なエネルギーしか用いないなら，生産，消費（当然，選好も）は限られてくる。この条件下でもわれわれは民主主義を捨てないと言えるだろうか。1930年代のドイツ，20世紀のソビエトロシアは決して特殊ではない。民主主義を維持するためには古代ギリシャのように，生活環境がよくて，かつ民主主義の恩恵を受ける人間を限定する（すなわち，食料やエネルギーが多く手に入って，それが民主的「自由」，「平等」を行使しても不足しないほど，恩恵を受ける人間を十分に少なくする）しかないのか，われわれは考える必要があると思う。

一般均衡を考える。とりあえず最初に静学的な設定で，均衡を50億の人間が単一の市場をもち，まず全員が生存し，かつ「自由」と「平等」を守る配分とする。資源や食料が制約され，市場にコントロールを委ねても均衡は可能か。

直観的には不可能だと思うが……

参 考 文 献

A．L. Walras, Éléments d'Économie Politique Pure, 1874-77 4me éd., 1900, 久武雅夫訳，『純粋経済学要論』，岩波書店，1983）

B．L. Robbins, An Essay on the Nature and Significance of Economic Science 1932, 2nd ed., 1935（辻六兵衛訳，『経済学の本質と意義』，東洋経済新報社，1957）

C．J. Robinson, Economic Phylosophy, 1962（宮崎義一訳，『経済学の考え方』，岩波書店，1966）

D．馬渡尚憲，『経済学のメソドロジー』，日本評論社，1990

E．『聖書』，日本聖書協会

F．村上陽一郎，『新しい科学史の見方』，日本放送出版協会，1997

G．R. Descartes, Discours de la Méthode, 1637（三宅徳嘉・小池健男共訳，『方法序説』白水社，1991）

H．小林道夫，『科学哲学』，産業図書，1996